# The Futaka Spirit

(現教だより第3号)

実践日 2015/06/04

## ４年　音楽科
## 単元名「民謡に親しもう」

指導者　和中　雅子　先生

共に響き合いながら高め合う，暖かな学級風土の中で進められた学習でした。「相撲甚句」という新たな教材に引き込まれ，主体的かつ，共感・協同的な態度を豊かにしていく子どもの，キラリと光る姿が随所に見られました。

【学習活動】

1　本時の課題を確認する。

これまでの学びを振り返り，甚句らしさを探る

ｍｙ甚句を歌いながら課題について確認する

2　友達の甚句をもとに相撲甚句らしい歌い方を探る。

友達の表現から「いいな」と感じる理由を考える

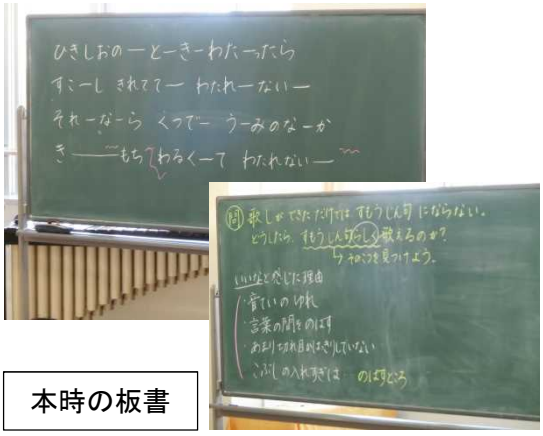
理由を言語化したり歌って試したりする

3　「いいな」と感じる歌い方について交流する。

4　自分の甚句を修正する。

本時で意味づけたことを次への興味へとつなぐ

5　本時を振り返り，自分にとって意味のある知を見出す。




本時の板書

（文責　橘　慎二郎）

【和中先生コメント】

今回の実践で子どもたちの民謡に対する興味は確実に高まり，音楽的な視点も見出せた。感・想・意としかけの関連図を入念に練り上げることで見えてくるものがあることが改めて分かった。自分にとって意味ある知を「興味」と置くならばそれをどう評価するのかという問いには明確に答えられなかった。夜の会で橘先生とも話し合ったが，感・想・意としかけの図をもう少し整理することでその知をどう置けばよいのか分かりそうな気がしている。今後の実践から探っていきたい。

# 和中実践【第4学年　音楽科】
## ～ 民謡に親しもう ～

## 本実践の主張点

Ⅰ　子どもが主体的に学ぶ意欲をもち続けるために，「自分にとって意味のある知」を，題材（単元）の興味に当たる内容として想定しておく。

Ⅱ　子どもが共感や協同のよさを実感するためには，子ども同士が表現を比較しながら，子どもなりの解を見出すような活動が有効である。

## 自分にとって意味のある知の想定について

本年度は，子どもの見方・考え方を育む過程を明らかにし，それに合わせた指導と評価を行うことで，その見方・考え方が「自分にとって意味のある知」を生み出すことにつながるという仮説を基に研究が進められている。昨年度までは第４観点に置かれていた「創造された知」は，観点の外に位置付けられ，新たな第４観点である「知識・理解・技能」を含む４観点全てが豊かになることで，自分に取って意味のある知が創造されるという見通しである。本実践では，この「自分にとって意味のある知」を題材の課題に当たる内容として置き，その知の有り様を見て取ることで，子どもの興味がどれだけ高まっているか，興味の矢印がどこへ向いているかということを教師が把握できるようにする，という提案がなされた。本単元における「自分にとって意味のある知」の一例について述べる。

**○　本単元で想定する「自分にとって意味のある知」**

・　民謡の歌い方は激しいけれど，つくったり歌ったりすることで身近になった。相撲甚句らしく歌えて楽しかった。(興味に当たる部分として想定)

本校の授業づくりの特色として，ゴールを共有しての逆向き設定がある。単元の課題を達成するために問題解決が行われていくように，ここでは，「自分にとっての意味のある知」を興味に当たる内容として想定しておくことで，そこにつながるプロセスにおいて子どもの主体性が高まる，という提案である。本時において子どもは，教師がモデリングした友達の生き生きとした姿に感受し，楽しみながら自分だけの相撲甚句を工夫してつくることができていた。橘実践では，自分にとって意味のある知は方向性として，教科の本質及び単元で育みたい見方・考え方に直結する内容に寄っていく，という提案がなされたのに対し，和中実践では，興味に当たる部分として設定されている。それらの想定の仕方にはまだまだ議論の余地があるが，「自分にとって意味のある知」は，ある程度具体的に例示できるものとして共通理解することができるのではないだろうか。

## 共感・協同のよさの実感につながる支援について

子どもたちが共感・協同のよさを実感しながら問題解決を進めていけるようにするために，本実践では一人では達成できない困難性の高い課題を設定した。具体的には，楽譜のない相撲甚句を教材として取り入れ，これといった正解がない中で，「相撲甚句らしく歌うには？」という課題について吟味や共通理解が起こるような場面設定を行った。これは，一人で歌って試すだけでは自分なりの解にたどり着けない子どもたちが，他者の評価を求めたりお互いに聴き合って批評し合いながら解を求めていく姿を期待した提案であった。しかしながら，確かに活動の困難性によって子どもの志向性は高まり，共感・協同のよさを実感することにはつながったが，どこに向かうべきかという吟味の視点が示されなかったために自分の課題に立ち返ることが難しい子どもも現れた。ここでは，質的転換点を捉えた具体的支援に生かすために，教師は教材のよさを捉え，吟味の視点を明確にもっておく必要があることを改めて感じることができた。

正解が１つでない「自分にとって意味のある知」はあくまで個々が見出す多様な着地点であるためオープンエンドで終わることも十分考えられるが，単元で育みたい見方・考え方については，具体的に想定し，どのような場面でどのような働きかけをしていくべきか，今後も考えていく必要がある。

## 成果と課題

○　「相撲甚句」という，感受・想像・意味付けが豊かになる新たな教材を取り入れたことで子どもの興味や関心は高まり，新たな知を創造していこうとする態度につながった。

△　子どもにとっての「意味のある知」の置き方及び置くべき内容については，さらに議論を深めていく必要がある。